

< 実践事例 東京都立白鷗高等学校 >

1. 取組・活動名

【トランスフォーマ・コネクション】
世界 17 カ国の日本代表校として、リオの高校とのオリンピック・パラリンピック交流活動を実施した。

2. 取組・活動のねらい

- 「文化ボックス」を通し、互いの高校が自国の文化を象徴する物品を送り合うことで日本の伝統・文化を再認識するとともに、交流先のブラジルの伝統・文化に触れる。
- 「スポーツが運ぶ交流」を通し、様々なオリンピック・パラリンピックの競技を体験し、競技そのものを理解するとともに、異文化理解や障害者理解を深める。
- 「文化フェア」を通し、両国の文化を紹介する映像を作成・交換することにより、日本の学校生活や伝統・文化を紹介し、開催国ブラジルの伝統・文化の理解を深める。

3. 教育課程上の教科名・時数

【生徒会の生徒及び高校2年生を中心に、50名ほどの有志による教科外の活動・時間】

4. 実施上の工夫

- ・「生徒の自主活動」担当教員の指導の下、学校近隣の提灯専門店や東京都障害者スポーツ協会等への連絡・調整、撮影計画と映像制作の絵コンテ作成、スペイン語が堪能な保護者への協力依頼など、生徒が自ら企画・運営・立案・実行を行い、巨大提灯を制作した。
- ・「各種団体との連携」東京都教育委員会、様々なオリンピック・パラリンピック競技団体や浅草サンバカーニバル実行委員会、映像制作会社などと連携し、生徒の交流活動の活性化を図った。
- ・「交流活動の公開」交流活動の様子はブログの形でホームページに随時アップするとともに、東部学校経営支援センターのグッドニュースにも投稿した。
- ・同時期に公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会と東京都主催によるフラッグハンドオーバーセレモニーに向けた人文字の映像制作に貢献した。

5. 本取組・活動の内容

【巨大提灯の制作】

- ・本校中学生が伝統・文化体験を実施している近隣の提灯専門店と連携し、表に「白鷗」、裏側に交流校のイニシャル「EWH」の文字を描いた巨大提灯を制作した。
- ・生徒会執行部が地元の協力を得て集めただるまや折り紙、千代紙など日本の伝統・文化を象徴する物品を、生徒たちが作成した英語の説明を加えて一つの大き箱にしてブラジルの流校に贈呈した。



【パラスポーツ体験】

- ・生徒会と高校2年生を中心に、約50名の生徒でオリンピック・パラリンピックの各種団体と連絡をとり、体験場所や時間、人数などを調整して競技体験を実施した。
- ・体験した競技は東京都主催の「NO LIMITS SPECIAL GINZA & TOKYO」における車いすバスケットボールを皮切りに、ゴールボール、ポッチャ、パラローイング、7人制サッカー、アーチェリー、セーリング、カヌー、ボートなど様々である。
- ・都内各会場に足を運び、各々が体験した様子をDDIにまとめ、交流校に贈呈した。



【文化交流】

- ・日本とブラジル両方の文化を一枚のDVDにまとめ送り合う「文化フェア」を実施した。
- ・生徒たちが自ら映像の絵コンテを制作し、朝からビデオカメラを抱えて日本の高校生活を映像にするとともに、これまで学んだブラジルやリオデジャネイロの文化についても映像に仕上げた。
- ・内容は、日本の学校紹介（授業の様子・昼休み・学校給食・放課後など）、日本文化の紹介（本校和太鼓部・長唄三味線部・百人一首部などを交えた和文化紹介）、ブラジル文化紹介（歴史・プレゼン・サンバなど）などである。



6. 成果

- ・生徒会生徒が中心に地元の協力を得て活動をしたことで、改めて地元の伝統・文化を知るきっかけになったとともに、交流校との交流活動で、日本では馴染みのないブラジルの文化を知り、生徒たちが他国の文化や風習を知る良いきっかけになった。
- ・トランスフォーマ・コネクションにより、オリンピック・パラリンピックについての理解を深めることができただけでなく、言語や文化などにも触れ、ダイバーシティを尊重し広く世界に関心をもつ良い機会となった。
- ・パラリンピック競技体験をとおして、障害者の方々への理解が深まり、自分を見つめ直し他者を思いやる気持ちを持つことの大切さを再認識した。
- ・参加した生徒達の声
「今回、オリンピック・パラリンピックを身近に感じることができ、これを機にみんなオリンピック・パラリンピックを観てくれればいいなと思います。」
「国によって文化や風習が異なる中で、未だに内乱や紛争が存在します。今回、国を超えた共通の体験ができ、このような活動があれば、世界が仲良くなれるのではないかと思います。」